

図書館
展示

Welcome to our CAMPUS

2020年8月20日(木)～



校舎のパネルのモチーフになった貴重楽譜

2011年に完成した新1号館と、2019年4月にオープンした7号館2階のカフェには、古い楽譜をモチーフにしたパネルがあります。実は、モチーフとなっている楽譜は、図書館が所蔵する貴重楽譜です。普段はめったに閲覧することができない貴重楽譜をいくつかセレクトして展示しています。キャンパスを歩くだけで貴重楽譜が見られる環境は音大ならではのものです。ぜひご覧ください◎

期間中、4号館図書館エントランスにて展示中！



2011年に完成した新1号館と、2019年4月にオープンした7号館2階のカフェには、古い楽譜をモチーフにしたパネルがあります。

実は、モチーフとなっている楽譜は、図書館が所蔵する貴重楽譜です。普段は温度や湿度が管理された保存庫に保管され、めったに閲覧することはできません。今回はそれらの貴重楽譜のうちいくつかをセレクトして展示しています。

新1号館にはこの他にもたくさんのパネルがあります。キャンパスを歩くだけで貴重楽譜が見られる環境は音大ならではのものです。お気に入りの場所、お気に入りの楽譜パネルを見つけてみませんか？

■展示資料

今回は新1号館地下1階のパネルのモチーフとなった楽譜を中心に展示しています。

ヘンデル『メサイア』 (新1号館地下1階)

Händel, Georg Frideric, 1685-1759
Messiah an oratorio in score
請求記号：S11-327

《メサイア》のスコアは1767年に出版されたが、楽譜上の細かい直しが翌年まで4回行なわれた。その後同じプレートを用い、表紙の語句やデザイン、出版者の変更等を経て1807年までに十数回にわたって出版が続けられた。この楽譜は初版出版者による最後の版だが、正確な出版年は不明である。ヘンデルの肖像画の口絵と予約者リスト付き。この時代に大規模作品のスコアの出版は稀であったが、《メサイア》出版は出版大国であったイギリス人のヘンデルに対する敬愛の念を表している。

ベルニエ『フランス・カンタータ集 第3集』 (新1号館地下1階)

Bernier, Nicolas, 1665-1734
Cantates, françaises, troisième livre
請求記号：S10-018

カンタータ集の第4曲《コーヒー》は、この飲物の魅力的な味と香りを酒と対比させて賛美した作品である。コーヒーはフランスへ1643年に入り、1702年にはパリのカフェ「ル・プロコープ」が開店した。バッハの有名な《コーヒー・カンタータ》(1734年頃)に先駆けて作られた、流行の先端をいった曲である。表紙の作曲者表示は単に“Mr.”(ムッシュー)とだけ記されている。印刷は彫版により、声部はハ音記号とト音記号が混じる。

羊皮紙に記されたネウマ譜 筆写譜 11世紀 (新1号館地下1階)

Parchment manuscript, fragment
請求記号：S12-777

11世紀の聖歌本で、主としてマリアの受胎およびキリストの生誕に対するレスポンソリウム(聖歌の一種)が、南ドイツ式書体の譜線なしネウマで記されている。右欄外には、ルネサンス時代の筆跡で「プライテンブロンに十分の一税として」とある。

ルネサンス時代には、この種の羊皮紙が軽視され、乱雑に扱われたので、この一葉もおそらく税を包むための袋として利用されたのであろう。なお、プライテンブロンとは、レーゲンスブルク近郊の地名。羊皮紙の大きさは縦33センチ横22センチである。

羊皮紙に記されたネウマ譜 筆写譜 14 世紀 (新 1 号館地下 1 階)

Parchment manuscript, fragment

請求記号 : S11-026

赤色 4 線四角形ネウマ譜によるアンティフォナ集 (アンティフォナは聖歌の一種) の一葉で、テキストは復活祭用のもの。おそらく 14 世紀後半にパドヴァ周辺で書かれたと推定される。

頭文字 A (Angelus) にはキリストの復活の場面が描かれており、そこにはジョットのフレスコ画の影響が認められる。羊皮紙の大きさは縦 43 センチ横 19 センチ、頭文字 A は縦 70 ミリ横 67 ミリである。

モーツァルト『ドン・ジョヴァンニ』ヴォーカルスコア (7 号館 2 階)

Don Giovanni

Mozart, Wolfgang Amadeus, 1756-1791:

München, Drei Masken, [1922]

請求記号 : S10-935

様々なサイズによる 25 枚のリトグラフ入りの楽譜で、限定 200 部のうちの 36 番目。ピアノ編曲はベルンハルト・パウムガルトナーである。リトグラファーのヘルマン・エバース (1881-1955) は、ライプツィヒ生まれの画家で、ミュンヘン美術学校で学ぶ。トーマス・マンやリルケと親しく交際した。25 の書籍にリトグラフを描いたが、その中でもメーリケの《旅の日のモーツァルト》と並んで、本書は名高い。

<https://www.lib.kunitachi.ac.jp/>
2020.8 国立音楽大学附属図書館

